

観光地弟子屈の看板である二つの湖―摩周湖と屈斜路湖は相反する魅力をそれぞれに放っている。両方とも火山性のカルデラ湖であるが、摩周湖が流入・流出河川がないことを特徴とすれば、屈斜路湖は釧路湿原までつながる流出河川、釧路川の源となっている点である。また一方の摩周湖が、湖面の観光利用が一切禁じられていることに対して、屈斜路湖はカヌーやヨットなどの水上スポーツ、遊漁や自然体験などさまざまな多種多様な人たちに親しまれている湖だ。

いや、人間だけではない。冬季にはシベリアからの冬の使者―白鳥が400羽を超える群れを成してやってくる。水面下に目を向けると、マス類などの魚も豊富に生息する。かたくなに人を寄せ付けない孤高の山上の湖が摩周湖ならば、屈斜路湖は暮らしの中にみるブレイグラウンドとしての楽しさ、面白さが満ち満ちた湖といえよう。

特に屈斜路湖は、釣り人にとって雄大な自然の中で大型のニジマス・アママスが釣れるフィールドとして、90年代中頃からにわかにはその存在が全国へと広がった。時を同じくしてスポーツフィッシングという釣りの形態、つまりキャッチ&リリース(※)を前提としたルールが浸透し始め



て、釣果以外の要素も注目されるようになった。素晴らしい自然環境の中に独り身を置き、糸を垂れ、魚たちとひと時の駆け引きに興じる。こうしたファンならではの愉しみの一つ一つが積み上がり、屈斜路湖をスポーツ・フィッシングのメッカへと押し上げる。

とはいえ、そこまでの道のりは長く険しかった。1938年に屈斜路湖の湖底で起こった噴火により、酸性化した湖水は魚が生息できない環境となった。それから50年、80年代中期からは水質が徐々に中性化して、町の放流事業の成果もあり、魚の生息が確認されるようになる。しかし復興したと言っても、もともと流入河川が少ない湖で自然再生産には限界がある。町独自の放流事業だけでは、漁獲を目的とした釣り人たちが産卵期の河川での釣りなどにより、せっかく回復した魚が減少、特に人気のあるニジマス・アママスなどは激減したという。

この状況に危機感を持った地元元の釣り人たちは、98年に任意の釣り団体を組織するなどして広く寄付金を募り、稚魚を放流する活動を始めると同時に限られた資源の保護や自然環境の重要性を訴えて、ルールづくりとマナー向上にも力を入れた。それらの活動は

た魚が減少、特に人気のあるニジマス・アママスなどは激減したという。この状況に危機感を持った地元元の釣り人たちは、98年に任意の釣り団体を組織するなどして広く寄付金を募り、稚魚を放流する活動を始めると同時に限られた資源の保護や自然環境の重要性を訴えて、ルールづくりとマナー向上にも力を入れた。それらの活動は



ボツンと半身を湖面に現した釣り人の思いの先にあるものは、まだ見ぬ大物の姿か、あるいは湖で育った自然の息吹なのか。自然とひとつになる時間、それがスポーツフィッシングの醍醐味なのかもしれない。

Data: 屈斜路湖

日本最大の屈斜路カルデラは、周囲 57km、面積 79.6km²、国内で6番目に大きい湖である。夏季は釣りや水上スポーツのほか、キャンプや露天風呂を楽しむ人々などで賑わう。冬季は全面結氷するが、地熱が高い砂湯地区では毎年400～500羽の白鳥が解氷したわずかな湖面で越冬する姿が見られる。厳冬期には、氷の膨張と収縮で起こる「御神渡り現象」と呼ばれる氷の造形が生まれる。そのスケールは、時には長さ10km、高さ2mに及ぶこともある。



※キャッチ・アンド・リリースとは、釣り上げた魚を漁獲として扱わず、川や湖など元の環境に再放流、返す行為を指す。

長い年月をかけて回復した
魚たちの未来を守る



Rainbow Trout

屈斜路湖